HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	東方正教の典礼とイコン ： 日本正教会の源流
著者	桑原，俊一；KUWABARA，Toshikazu
引用	開発論集(87)： 129-149
発行日	2011-03-01

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

開発論集　第87号　129-149(2011年３月)

東方正教の典礼とイコン
―― 日本正教会の源流 ――

桑　原　俊　一*

はじめに

今日エルサレム旧市外は４つの地域に区分される。白黄色の石灰岩で石積みされた城壁で包まれ，東西に長方形を残す中世風の都市である。住民はおおかた宗教によって色分けされて住んでいる。北東にイスラームを信じるムスリム地区，北西にはユダヤ教徒地区がある。キリスト教徒の場合，２地区に分かれる。北西にキリスト教徒地区（クリスチャン・クォーター）が位置し，その名称にもかかわらず，多数派のキリスト教徒ではなくギリシア正教徒の居住区といってよい。さらに南西に広さや人口からいえば帯状の小さなアルメニア正教徒地区がある。宗教改革以降に派生した所謂プロテスタント系教会は城外に散在するにすぎない。

このエルサレムでのイコン（聖像）との出会いが東方正教会を筆者に感情移入させることになったし，アルメニア正教会の奉神礼にあずかることで礼典の秘儀の象徴性に驚かされることになった。この都市でのこの体験が東方正教会を考える原点になった。

札幌といえば，かつて東は豊平区福住までで，ドームから先は野原であったと聞いた。確かにその面影はないではないが，今や札幌のベットタウンのひとつである。この境界のランドマークとして福住寺と札幌ハリストス正教会があげられよう。この教会堂の存在を知ったのは今から15年程前のことである。天空を突く尖塔と十字架を供える建造物からカトリック教会であるとばかり思っていた。この会堂がロシア正教会[1]を源流とする教会であることを知ったのは在外研修でエルサレムを訪れ，アルメニア正教会の奉神礼にあずかってからのことである。ローマ・カトリック教会とその後分派するプロテスタント教会以外十分知らなかった筆者にとって，極めて新鮮な体験であったが，また途惑いでもあった。キリスト教会には諸宗教同様，諸派が存在する。危険を恐れず二極化して分類するとすれば礼典とイコンの特異な存在からその一極に正教を採ることができるであろう。そこで本稿では正教の典礼とイコンの秘儀について検討してみたい。札幌ハリストス正教会は日本最初のイコン製作者となった山下りんによるイコンを最も多く所有している。そこで山下りんの生涯にも言及しながらイコンと西欧宗教画についても検討を加えたい。

*（くわばら　としかず）開発研究所研究員，北海学園大学人文学部教授

1．典礼様式

1.1．ローマ･カトリック教会と東方正教会の誕生

330年，時のローマ皇帝コンスタンティノスはヨーロッパと西アジア（オリエント）の接点に当たる地中海と黒海にまたがるボスフォラス海峡に面したビザンティウムに遷都した。これを契機に大帝の名をとってコンスタンティノープル(コンスタンティノポリス，現在のイスタンブール）と改名されることになる。遷都の目的は明確である。シリアやエジプトといった帝国内の西アジアを重視したためである。465年西ローマ帝国が滅亡した後は，東のビザンティン帝国がローマ帝国となった。後に第2のローマは「ギリシア人の帝国」とも呼ばれることになる。キリスト教の教義は4世紀から8世紀にかけて7回にもわたる全教会公会議[2]で確立されていくのだが，そのいずれもコンスタンティノープルの皇帝によって召集され，帝都ないしその周辺で開催された。中世西欧のローマ・カトリック教会が戦闘状態に置かれていたこの時代，ビサンティン教会は皇帝の庇護のもと初代教会以来の伝統を維持し，発展させてきた。典礼，聖歌やイコンの文化はその典型といってよい。しかしそのビザンティン帝国も西アジア諸国，とりわけペルシアとアラブの異なる文化と接して生きる一方で，西欧諸国がエルサレム奪還を掲げて興した十字軍を巡っては価値観の違いから対立を深めていく。ついに1453年にオスマン・トルコ軍の軍門に降った。歴史に翻弄されながらもキリスト教会は教会堂とその文化財によって伝統的教義や典礼を保存してきた。典礼に焦点を当てながら東方教会の典礼の歴史と特徴を見てみよう。

キリスト教共同体が，福音のメッセージを儀礼として執り行う典礼は多様な文化と言語によって表現された。ギリシア語とラテン語はヨーロッパから西アジアにかけて典礼の言語となった。セム語族のひとつであるアラム語は中央アジア，インド，中国にまでキリスト教を伝播する道具としての言語になった。つまり3世紀にはモザイク画のように固有に組織されたキリスト教的共同体が発生していた。しかしながら典礼についていえば歴史的経緯も複雑に絡んでローマ的伝統の典礼が一人歩きをしてしまったのである。キリスト教の典礼といえば西方キリスト教(カトリック)のラテン典礼様式を指すようになってしまったことは残念である。

西方ラテン典礼と東方等に広がったキリスト教礼典を比較すれば大きな違いは典礼の多様性に見出すことができるだろう。西ヨーロッパではガリア，イスパニア，ケルトあるいはゲルマニアの諸影響を受けながら「ローマ的」なるラテン典礼を形成することになるが，ひとえにラテン語のみを共通語とし，その範囲を世界に拡大することで，典礼の豊かさを失う結果となった。積極的な意味合で換言すれば，典礼の簡素化の道を歩んだといえよう。それに比べ東方の諸教会は各地の異質な環境を生き，また分離を続けていく中で共通の使徒伝承を典礼として遵守してきたといえよう。キリストのことばそのものは典礼を通して人に委ねられている[3]。このことはビザンティン典礼によく表れている。東方とはビザンティンをはじめ，アレキサンドリア，エルサレム，カッパドキアの諸教会を含むもので，それら各地の典礼要素を含む。修道生活

者の発祥の地とされるエジプト，パレスティナ，コンスタンティノープルやアトスからの影響を受けつつ，さらにアラム語(シリア語)，コプト語，エチオピア語(ゲーズ語[4])，アルメニア語といった言語による地域による典礼も重要である。これらが相互に影響しあい文化的多様性を醸し出している。本稿では典礼の中心をなす秘跡（機密）そのものを射程に検討するものではない。東方礼典とはなにか，歴史的視点を機軸に以下簡潔に概観する。

1.2. 東方正教諸教会

ローマの伝統が唯一使徒的教会としてその権威を確保・維持しようとしたことに対し，東方の諸教会は都市の政治的重要性が重視された。東方からの代表者が多数を占めた主教会議においてコンスタンティノープルの主教座が新しいローマとして第2の地位が認められることになる。カルケドン公会議[5]後，エルサレム主教座も高い位置を確保し，典礼上の影響を及ぼすことになった[6]。

カルデア（メソポタミア）の諸教会に目を向けてみよう。クテシフォン・セレウキア[7]の主教パパ・バール・アッダイは4世紀の初頭から彼の権威の下に置こうとした。この教会は，アンティオキアの総主教の座とローマ世界にける教会の権威から独立を宣言したが，ニカイア信条はこれを共有していた。けれども，徐々に分離し，他のキリスト教からクテシフォン・セレウキアの総司教区は決別していくことになった。

同様な分裂現象はアルメニア教会においても生じている。アルメニアの宣教は二つの方向から行われた。つまりシリア語圏の東方からとヘレニズム化された小アジアからである。その結果として，アルメニアはローマ帝国とペルシア帝国に分割されたが，それゆえ皮肉にも自国の独自性と自立を確保することにもなった。390年のことネルサス(アルメニア教会の総主教）の息子，カトリコス・大サハクはアルメニア文字の案出者であるマスロプ[8]を長とした聖職者たちに，聖書や偉大な教父たちの著作を翻訳させた。この過程でシリア語のテキストを蒐集するうちにエルサレムの典礼を知ることになったのである。こうした機会がアルメニア典礼の大枠を形成した。隣国のグルジアでは決定的にコンスタンティノープルの勢力圏に編入されていく[9]。

エチオピアへの伝道はその起源からすればアレキサンドリア総主教区の権威のもとにあったが，シリアからの新しいキリスト教，それもローマ化された典礼に影響された。しかしアレキサンドリア総主教区に帰属していることがエチオピア典礼のその後の発展を条件付けたことは疑いない。

5世紀半ばには，教義学上の議論（三位一体論やキリスト論）と分裂を繰り返してきたにもかかわらず，教会はその組織を固めていく。ローマ帝国には5つの総主教区が存在する。そのうち4つは使徒に由来し，ローマ，アレキサンドリア，アンティオキア，エルサレムである[10]。他方，コンスタンティノープル主教座は帝国の首都であって，ヨハネ福音書12章20－22節によることば「さて，祭りのとき礼拝するためエルサレムに上って来た人々の中に，何人かのギリシア人がいた。彼らはガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て，『お願いです。イエスにお目にかかりたいのです』と頼んだ。フィリポは行ってアンデレに話し，アンデレとフィリポは行って，

イエスに話した」を典拠に権威付けすることはともかく，首都として政治的に重要であったことが，この主教座を組織上特別な位置に置いたのである。ローマ帝国の外にはペルシアとアルメニアという二つの総主教区があり，それらは自立性を主張しているにもかかわらず，カトリック信仰の上に立っているといえよう[11]。

1.3．今日の東方正教諸教会

キリスト教は元来西アジア，所謂東方の宗教である。イスラエルのイエス・キリストの教えは瞬く間にギリシア・ヘレニズム[12]に育まれながら地中海一帯に拡張さていくことになる。キリスト教が西欧の宗教と看做されるようになったのは，西欧列強が世界を席巻し，植民地化が推し進められた結果に他ならない。キリスト教誕生から一千年ほど経つと，東西の教会には多様な相違が現れてくる。ローマ教皇とコンスタンティノポリス総主教はキリスト教会の権威をめぐって神学論争を引き起こした。その頂点に立つ対論は，ローマ教会がそれまで「父から」とされてきた聖霊発出を「子からも（フィリオケ）」とする「フィリオケ」問題にあった。ついに宥和の道は閉ざされ1054年に東西の教会は決定的に分裂する。以降，西欧のカトリック教会と東の正教会の名の下に異なる道を歩むこととなった。

このころのカトリック教会は，5総主教制からローマ教皇を「神の代理人」とするピラミッド組織に仕立て上げられていた。東方正教会はペルシアやイスラームの支配下にあり，ビザンティン帝国コンスタンティノープルの総主教が中心となったことも重なり，「ギリシア正教会」の呼称が定着することになった。

9世紀にはいると正教会は，ブルガリア，ルーマニア，ロシア，セルビアといった東欧諸国に広がっていった。ビザンティン帝国がオスマン・トルコによって滅ばされると，正教の教義・典礼を維持していったのはロシアとバルカン諸国の教会であった。ローマ・カトリックが教皇を頂点とするピラミッド組織によって教義・典礼を画一的に広めたのに対し，正教会は各地に開かれた民族名称を戴いた自立教会として拡張を始めていた。ギリシア正教会，あるいはロシア正教会の名でよく知られている正教会だが，東方教会とも呼称される。それはオリエント（東）に誕生したキリスト教の伝統と典礼を維持しているからである[13]。

礼典用語としてはギリシア語を用いることが多かったが，時代が下ってスラブ世界やルーマニアなどの自立教会ではその地方の言語が用いられていた。これらの教会の中でも最古のものはブルガリア教会である。典礼用語としてキリル文字が考案されると，教会はスラブにおける初めてのアルファベット文字となった古ブルガリア語つまりスラブ語を採用した。

1448年キエフ府主教区がフィレンツェ公会議でローマ教会と合同したことで，モスクワにひとつの分離した府主教区が生まれ，1345年以降，ここがキエフの固定した住居となる。それから約50年後，府主教ゾシムスは，1492年に，ビザンティン帝国の滅亡（1453年）によってモスクワがその権威を継承し，第3のローマになったことを宣言する。その1世紀後この事実は，モスクワが総主教区の中で府主教座になったことにより，諸教会の承認

を得たのである[14]。

2．東方典礼の特徴

2.1. ローマ礼典との比較

ローマ典礼の特徴はその簡素さと単純性にある。換言すれば東方典礼は儀式の長さと複雑さにある。加えて儀式の厳粛さが上げられる。しかし儀式は聖なる雰囲気にもかかわらず,一般的で親しみやすさを兼ね備えている。会衆は常に祭儀（奉神礼）の中で積極的な役割を果たすよう促されている。輔祭（助祭）は絶えず会衆の注意を喚起すべく，様々な指示を出す。祈りへの招きなどを先導する。動的儀礼といえる。これに比べローマ典礼は貴族的・静的とさえいえよう。かといって会衆は共同体から排除されるわけではなく，むしろキリスト者の祭司的機能を広く考慮している。しかしこの祭司的機能は何世紀にもわたって聖職者に留保されてきたものである[15]。

東方典礼の大部分は修道士たちの影響を受けた。彼らは小都市や町や村の出身者で，民衆も修道士でさえ典礼に詳しい者はいなかったのである。しかしビザンティン典礼だけは当時の歴史の荒波を潜りぬけて独自の形態をもつまでになっていた。コンスタンティノープルは実際，エルサレムやアンティオキアからの典礼遺産で豊かになっていた。さらにこれに皇帝の宮廷における儀式がつけ加えられた。一般民衆の典礼はその基本形を残し，スラブ諸国とオスマン・トルコ支配下のギリシアにおいて発展していった[16]。これは東方正教会の秘儀に対する強固な感覚を洗練していくことになる。この秘儀への感受性という点で東方正教会は西方教会と際立たった違いを見せている。

東方正教会には共通する特徴とともに，各地の文化と典礼には多様性が認められる。ことばを重視する典礼，象徴性に重きを置く典礼，感受性の表現の仕方に工夫を凝らす典礼など様々である。以下いくつかの典礼について検討する。

2.2. 東シリア典礼

伝統的キリスト教の中で最古で最も簡潔な典礼である。この典礼は，ユダヤ教の影響を強く受けており，キリスト教の誕生以来半ば修道制的組織として成立し，ローマ世界の国境外で極めて早い時期に定着した。セレウキア総主教区の領土にはキリスト者がいなかったこともあり，ペルシアや中央アジア，インドにあっても大部分は信徒がいなかった状況の中で比較的小さなキリスト教共同体が存続していたにすぎない。

この典礼の特徴はなんといってもその構成要素の形式にある。すべての儀礼は「主の祈り」(天主経)ではじまる。これに聖書朗読が続く。さらに修辞法とは無縁な注解的・注釈的と思える説教がリズミカルに行なわれる。これらに長く単調な詩篇が交互に挿入されるといった具合である。

こうした儀礼は，至聖所の前面を閉じている入り口が唯一つだけであって，装飾の施されない壁の前で行なわれる。古代の教会はシナゴーグ[17]のように建物の真ん中で高くなった広場であるベーマ[18]が中心となる。ここで司祭は朗読を行なうことになる。秘跡の典礼はきわめて制限されていて，大抵のキリスト教会において執り行われる聖週間の間でさ

え，儀式らしい儀式は行なわれない[19]。

2.3. コプト典礼(1)

東シリア典礼に良く似た特徴を持つ。簡素でかつ冗長である理由は修道院の典礼であったことによる。それぞれの歌い手がその能力を十分生かしてリズムをつけて賛歌を民俗音楽の旋律にのせて謳うのである。外見上の特徴といえば，天主経を唱えるときに手を拡げること，奉仕者が至聖所に入る際に靴を脱ぐ[20]ことが目立つ。至聖所はいくつかのイコンが置かれ，柵によって身廊から分離されている。会衆が奉神礼のアナフォラ[21]まで参加する典礼は他にないであろう[22]。

2.4. コプト典礼(2)

典礼の多くをエルサレムとアンティオキアから取り入れたれた。この2都市は典礼の歴史において強固な関係にある。キリスト者の祈りが象徴性に富むのはこれらの都市に由来するものなのである。典礼の頂は，ことばで言い表すことない秘儀を表現することと，その臨在を感じさせることにある。アンティオキアの典礼はすぐれて終末論的であり，秘跡を通してキリストの再臨を前もって待望させることになる。ここでは讃歌が極めて重視され，発達した。会衆はこの秘儀の神聖性に預かることができるように，儀礼の全てが詩篇で飾られるが，このエルサレム由来の儀礼は救済史の決定的瞬間を獲得する象徴的出来事なのである。ある意味で極めて人間性に富んだ礼典であるともいえる。聖週間に行なわれる儀礼の中で印象的な象徴性はクライマックスを迎えることになる。

2.5. ビザンティン典礼

アンティオキアから決定的諸特徴も継承した。これに改善と洗練性がつけ加えられることによって，ビサンティン帝国のエキュメニカルな典礼となった。ここではシリア，アジア的なヘレニズムにあった過剰さはギリシア的中庸と平行感覚によってそぎ落とされたのである。

この典礼はさらにスラブの地において新たなるエネルギーを受ける運命にあったように思われる。しかしそこで多くの変更が加えられたわけではなかった。スラブの典礼はすこぶる保守的である。現行のギリシア典礼に近いといえる。もかかわらず，それは，スラブ民族の篤信な信心と，絵画あるいは音楽という芸術的才能によって世界中に知れわたっているビザンティン典礼に，新たな息吹を与えたのである。とりわけイコンにおいて傑出している。イコンはノブゴロード[23]とモスクワの学院によって典礼儀礼の中に聖なるものとして取り込まれた。聖なるイコンは，伝統的に長い間聖なるものと看做されてきたが，コンスタンティノープルでもギリシアにおいても，典礼儀礼や祈りの中に取り入れられることはなかった。かなり早い時期からキエフで作曲された独特の歌は18世紀から19世紀にかけての偉大な作曲者たちに大きな影響を与えたのである。今日，それらはロシア，ウクライナやブルガリアの通常の合唱曲にもなっている[24]。

2.6. アルメニア典礼

イコノスタスがないことが他の典礼と大きく異なる。祭壇を取り囲んでいる覆いもほとんど存在しない。ただ絢爛豪華な祭服を纏っ

た司祭や奉仕者たちの振る舞いが重要なのである。静寂と荘厳さに満ちた典礼であり，かつ歌声ともに愁いを帯びた典礼は美しくさえある。カエザリアやアンティオキアの古い典礼がもつ厳粛さと簡素さを保持している点で，ビザンティン典礼へ発展する以前のものなのである[25]。

3．イ　コ　ン

3.1．イコンの起源と発展

イコンとはビサンティン帝国で栄え，ロシアと東欧に継承された東方教会の礼拝で重要な位置を占める聖像である。「イコン」はギリシア語を語源とし，その意味は「似姿，印象，映像」などである。キリストや聖母マリア（聖生神女）あるいは聖人を書いた聖なる像のことである（本稿においては「描く」を用いず「書く」とした。なぜなら正教においてイコンは描かれるものではなく書かれるものとするからである）。

早くも１世紀にイコンは教会に現れる。２世紀の間に墓地の壁面などに魚（以下図像については脚注の付則として一括し後置した。図１）[26]や羊飼いでキリスト（ハリストス）を，鳩（図２）[27]でキリストの平安，孔雀（図３）[28]で復活を表現したことが分かっている。ローマやアレキサンドリアのカタコンベ（地下墓地）には２－３世紀ごろに書かれたと思われるキリストの生涯をモティーフにした画像表現が見られる。東方正教会の教父（聖師父[29]）たちは４，５世紀にはイコンの存在を証言し，その重要性を主張している。

聖大バシレイオス（330－379年頃）は言う「私のまえに立ちなさい。諸聖人の偉業を書き出す聖像画師たちよ，私は致命者（殉教者）たちの勇敢な働きを絵筆にとらえた，あなた方のイコンによって圧倒される。あなたがたのイコンのなかに極めて生き生きと書かれた戦士の姿をみよう。あなたがたのイコンの中に競技をはじめた方であるキリストの姿が描かれよう」と[30]。

「絵の具で書いた聖書」とも言われるイコンは，ことばが耳を通して伝えるものを，図像を通して示したものともいえる。それゆえイコンは信徒に信仰と祈りの心を促し，祈りを助ける役割を持っている。イコンの正当性の根拠を簡潔に示したのは「イコンに捧げられる崇敬は原型に至る」というバシレイオス（330－379年）のことばである。言い換えれば，イコンそのものを拝むのではなく，イコンに書かれた神に祈るのである。イコンは「天国を映し出す鏡」であるともいわれる。東方正教会にはイコンのない祈りはありえないのである。信徒は聖堂に入ると，最初にイコンに蠟燭を供え，十字を切ってそれに接吻する。聖像を通して見えざる神に出会うのである。まさにイコンなくして正教会は在りえない。

一時期，聖像は偶像礼拝であると主張するイコノクラスム（聖像破壊運動）が起こる。しかしこうしたイコンによる表現は726年聖像論争が始まるまで盛んに製作され続けた。結果としてこの論争により聖師父たちが神学的にイコンの正当性を弁証することになった。

イコノクラスムの立場にたいし聖師父たちが展開した論点は以下のように要約されよう。「ダマスコのヨハネは自らイコンを制作しながらパレスティナのサバス修道院での瞑想のうちで反駁する。その要旨は，（イ）今は旧

約時代をすぎ，神は受肉し，現在も歴史に関わっている。従ってこの世界の質量的なものは真理の地平を拓き，神的なものにまで高められる可能性にある。(ロ)原型とイコンとの間に本質的同一性が成立しているのは父と子の間だけであって，ほかのイコンは原型の反照にすぎない。(ハ)従ってイコンにおいて真の原型として礼拝（ラトレイア）されるのは神だけであり，イコンそのものは崇敬（プロスキネーシス）を受けるに過ぎない，である。[31]」

イコンの表現は世紀ごとに数も種類も増し加えられ，いっそう整えられていく。6世紀にはビザンティン様式といわれるイコン表現がはじまる。この様式はビザンティン帝国のおかれた首都の地理的位置によって形成されていったことはいうまでもない[32]。ヘレニズムとオリエント（西アジアとりわけシリア）が融合した文化の一つの形態がビザンティン様式なのである。古代オリエント，とりわけアッシリアの工芸美術，中でも実に細密で写実的な浮彫画(図4)[33]の伝統はこの地域の遺産であった。ヘレニズムはこうした西アジアの美的表現に洗練さと均衡感覚を付け加えたのである。目の偶像(図5)[34]といわれる小像が古代シリアから発掘されているが，いかにも目の大きさが誇張されている。この画法はシリアを経由してビザンティンのイコンに反映された。その意味でビザンティンのイコンは東と西の文化が融合した一例なのである。ビザンティンで誕生したこのイコン様式は以降，小アジア，バルカン半島，さらにロシアなどに広がって行くことになった。

イコノクラスム運動を克服した教会がイコン制作の規則を定めたのは691年の主教会議や787年の第2ニケア公会議などである。イコノクラスムの終息とともに9世紀も半ばを過ぎるころ聖像としてのイコン制作は活気を取り戻していく。10世紀頃には，時代ごとにある程度の違いは生じたとしても，次第に聖堂のイコンは一定の決まった順序で組織的に配置されるようになっていく。この体系化は現在においても継続している。

ビザンティンでの聖堂は象徴性に富んだ神の家である[35]。西に入り口を配し，太陽が昇る東に向かって歩くように作られている。キリストは世の光であるからである。東の端は司祭が機密を執り行う至聖所であり，中央にドームが天を象徴している。聖堂構造それ自体神の体，宇宙を現している。聖堂の最も重要なイコンはモザイクである。本来ギリシア人やローマ人が路などの舗装用に使用していた。後，彼らの宮殿や邸宅の床を色彩豊かに飾った。東方正教会はモザイク技法をイコン表現に転用したのである。美術史上，ステンドグラスが西欧ゴシック美術を代表するのに対し，モザイクはビサンティン美術の代表ともいえる。

モザイクによる聖像表現は，4世紀から14世紀にわたりビザンティン帝国で最も重要なイコン表現として広範囲にわたり用いられた（図6)[36]。というのもモザイクは褪色することのない材料であり，光輝き続けるからである。その後，西から十字軍遠征と東からオスマン・トルコの攻撃に，ビザンティン帝国の経済はいっきに疲弊していまい，モザイクイコンを始め聖像の制作は全くされたくなる[37]。それに変わって採用された表現はフレスコ画，つまり漆喰に顔料をのせて書くという方法であった。モザイクイコンとフレスコ

イコンは並存しえた。一つの聖堂に二つの様式で書かれる場合もある。

フレスコ壁画は古くはローマのカタコンベに遡ることは既に上述した。聖堂に書かれた壁画でいえばシリアのドゥラ・エウロポスのシナゴーグ跡に残り，250年より少しまえの制作であろう。5世紀にはエジプト，8－9世紀にはローマでも制作される。以後，東欧諸国とロシアには優れた沢山の壁画を見出すことができる（図7）[38]。第3の表現方法は板絵イコンといわれるもので，その技法は蛋白質と膠のような素材，とりわけ卵黄を使用して書かれるテンペラ画で，ギリシア・ローマ時代にまで遡ることができる。麻布をしっかり張って石膏を塗った板の上に制作される。8－9世紀に起こった聖像論争時代には多く板絵イコンは書かれていない。イコンがロシアに伝わったのは10世紀にビサンティンからキリスト教を受容したからといえよう。したがってロシアのイコンはビザンティン様式の板絵イコンであった。ロシアに定着したキリスト教は独自の発展を遂げる。イコンも例外ではない。ロシア固有の要素を持つイコンが製作されていく。15世紀にはその傑出したロシア様式ともいえるイコンはアンドレィ・ルブリョーフによる『三位一体（至聖三者）』が書かれる（図8）[39]。

13世紀に至るまで書かれる人物はひとりであったが，13世紀以降，できごとを表す板絵イコンも急速に増えた。スラブ諸国にこの技法を伝えたのは，ビザンティン帝国のイコン画師たちであった。板絵イコンはとりわけロシアにおいて盛んになる（図9）[40]。

東方正教会のイコンは，現代に至るまでビザンティンの伝統を継承している，といてよかろう。ビザンティンのイコンの伝統は表現の厳粛さと静謐に満たされた趣にある。しかし歴史を忠実になぞるとすれば，伝統は常に方向を一つにしていたわけではない。16世紀頃からイコンに西欧，とりわけイタリアの写実的宗教画の影響が大きくなる。ロシアのイコン画師たちは17世紀からこの伝統からはなれたし，シモン・ウシャーコーフに見られるイコンのように顔に陰影をつけいっそう写実性表現を取り入れるイコンも現れる。これらのイコンは西欧といってもフランスに由来する[41]。18世紀には西欧化の流れが一気に押し寄せ，テンペラ画イコンは，板の上に卵黄を水で溶き顔料を練り合わせた材料を用いた，さらには布（カンバス）に油絵具で書かれるようになる[42]。西欧化によってビザンティンの伝統は消えかけた。ギリシアにおいても独立戦争（1821－1828年）以降西欧化が行なわれた結果，イコン画師たちはビザンティンの伝統から離れるとともに技法においてもテンペラから油絵へと移っていった。彼らは総じて人体を写実的に描くことに重点を置いた。バルカン半島など東欧諸国も同様なことが起こった。ピヨートル大帝の時代，表現方法も伝統的イコン画法から離れ，イタリア絵画に見られる人間性あふれる写実的イコンになっていった。ピヨートル大帝はイタリアを手本に美術アカデミーを設立し，学生をイタリアに留学させ西欧の宗教画をイコンに反映させた。しかしながら，今日の東方正教においてはビザンティンの聖像様式に回帰しつつある[43]。

今日ではロシアではイコンといえばカンバスイコンといっていいほどである。聖堂をはじめイコノスタスはカンバスイコンで埋め尽

くされている。とりわけビザンティンからロシアに渡った正教はことばで表現される神学よりも目で見えるイコンで表現される神学，美的感性を通して信仰を捉えようとする道を選択した。ロシアでは聖堂ばかりか，公共の広場，家庭内の「美しい隅（クラスヌイ・ウーゴル）[44]」と称される祭壇あるいは道端に無造作に飾られた祠にイコンを見ることができる。

3.2. イコンの配置

聖堂はイコンで体系的に配置されている。至聖所と聖所はイコンが掲げられたイコノスタスで仕切られている。聖所の中央か聖堂の入り口に置かれる聖像安置台がおかれ，特定の聖像が納められている。

イコノスタスの中央部，王門を挟んで向かって右にキリストのイコン，左に聖母マリア（聖生神女）が配置される。大きい聖堂の場合は洗礼者ヨハネのイコンがキリストのわきに置かれる。イコノスタスに掲げられたイコンの数はその聖堂の大きさによって決まる[45]。比較的規模の大きい聖堂のイコノスタスには出入りする扉が左右にあり，右側に天使ミカエルと左側にガブリエルが書かれる。

イコノスタスの 2 段目は 12 大祭[46] もしくは 12 使徒が嵌めこまれる。王門の真上に十字架にかかったキリストのイコンが配される。その右に生神女が，左に聖ヨハネが書かれる。王門の扉には受胎告知（生神女福音）のイコン，加えて四福音書記者のイコンが配置される場合もある。大きな聖堂には預言者たちや奇跡の出来事なども配されるが，ドーム型であれバシリカ型であれ，すべてイコンは福音のことばの共鳴であり，正教会の神学を満たすものになっている。聖堂の構造とイコノスタスを含むイコンの配置や組み合わせのもつ象徴性は，聖堂の規模による多少の違いはあっても，基本的に変わっていない。イコンの組み合わせは 843 年イコノクラスムに勝利して以来確固たるものになっていった。アトス山の修道士，フルナのディオニシウス（1670－1745 年）は『聖像表現注解』を著し，イコンの組み合わせについてまとめ，紹介している。そのなかで板絵イコンや壁画イコンの制作の仕方や聖人の場面がどのように書かれるべきか，聖堂の組み合わせさえ説明している。現代の著名な聖像画師と言えば，ギリシアのフォティウス・カンタグルウがアテネで 1960 年に出版した『正教聖像の注解』を上げることが出来る。彼の注解はディオニシウスを遡る古い資料に当たるばかりか，徹底してビザンティン様式を掘り起こしている点でいわゆる西欧絵画と決別している[47]。

今日の函館ハリストス正教会[48] のイコノスタスは 3 段組みで，ロシアにおいて制作されたいわゆる布（カンバス）イコンである。建築工法の違いもあり日本正教会の場合，カンバスイコンに限られる。上記の組み合わせを函館ハリストス正教会に見て取ることができる[49]。

3.3. 日本最初のイコン画家となった山下りん

山下りんは常陸国（茨城県）笠間の武士の家庭に生をうけ（1857 年（安政 4 年）），16 歳で上京している。初めは日本画を学んだが，新設されたばかりの工部省付属の美術学校（工部美術学校と通称されていた）においてイタリア人画家アントニオ・フォンタネージ（1818－1882 年）から西欧絵画の指導を受け

ていた。21 歳の頃日本正教会に入信し，イリナの洗礼名を受けた。

ニコライはイコン画家を養成する目的で一旦は山下と工部美術学校をともにしていた山室政子をロシアに送り込む手はずを整えていた。しかし山室は結婚し石版印刷業を始めてしまったため，ニコライの心積もりは頓挫してしまう。急遽，山室と在籍をともにしていた山下がロシアは 1880（明治 13）年工部美術学校を中退し横浜からペテルベルグにあるノヴォジェーヴィチ復活修道院に送られたのである。山下がロシアに派遣されたとき正教会をどれほど理解していただろうか。おそらく十分な知識に至っていなかったと思われる。正教の真髄ともいえる典礼はもとよりイコンの理解についてさえ不十分であったのではないか。それゆえ洋画を学んでいた山下にとってノヴォジェーヴィチ復活修道院は試練の場所となった。

山下の『滞露日記』（4 冊にわたるノート[50]）によれば，彼女は 1881 年にペテルベルグに到着し，イコンを学びはじめた。この頃のロシア・イコンは西欧絵画から離れ，ビザンティン様式のイコンに戻りつつあった。アントニオ・フォンタネージからイタリア絵画を学んでいた山下にとって，ペテルベルグでの規則や規範を第一として書かれるイコンは彼女いわく「ヲバケ画」であったに違いない。それでも留学中，エルミタージュ美術館でルネサンスの以降の西欧絵画に出会うことで心歓びながら，他方ビザンティン様式とそれを発展させたロシア・イコンに興味を持たなくなっていく。山下が日記の中で伝統的イコンを「ギリシア画」と称し，ルネサンス以降の西欧の宗教絵画を「イタリア画」と呼んで前者を「ヲバケ画」として嫌悪していることも頷けよう[51]。ロシア・イコン対西欧宗教画とする見解は一見妥当するように思えるが，山下が留学した当時のロシアにおけるイコン制作の現状を斟酌すれば，山下のイコンは近代化・西欧化を推し進めていたロシアの歴史的・文化史的諸状況を検討することによって評価されるべきである。その意味で，山下研究の第一人者である鐸木道綱の指摘しているように彼女の画業を 2 項対立的に捉えることはできないであろう[52]。

留学中の山下の所属する修道院に通って教えていた教師はフィヨールド・イヴァノヴィチ・ヨルダン（1800－1883 年）という大家であった。彼はペテルベルグ美術アカデミーの絵画彫刻部の学長をも務めた。現存する山下の作品の中にはヨルダンの指導によると思われるものも存在する。ラファイロの『聖母戴冠』の模写はその典型であろう。ヨルダンは彼以外が模写したものさえ山下に模写させている。教材を模写することがおおむね美術アカデミーの初歩的カリキュラムであったにちがいない。エルミタージュ美術館に通う頃の山下は充実していた。日記によれば修道院の関係者はこうした山下の西欧絵画への傾斜に対し，伝統的イコンの学習に熱心であるように仕向けたのである。しかしこの状況は山下が置かれた特別な環境の結果ではなかったことは上述したとおりである。

19 世紀には西欧ルネサンス絵画がロシアに入り込みイコンにその影響を及ぼしていた。ロシア・イコンなるものは西欧のルネサンスによる宗教画とたいして変わらなくなっていたといえよう。イコン技法は板絵イコンに代わってカンバスイコンが一般的になる。

ここで確認しておかなければならないことは，ロシア・イコンの伝統が西欧技法に取って代わったわけではなく，むしろ共存していたといったほうが正確であろう。山下が留学したロシアのイコン制作の現場では2つの技法が使用されていた。

ただ19世紀後半になるとロシア・イコンの伝統を見なそうとする動きもあり，絵画としての美よりも精神性を表現するイコンへの回帰もあって，山下はそのはざまで絵師・画家の間で悶えていたのも事実であったろう。

山下は体調の悪化もあって5年の計画を2年で終え1883年3月日本に帰国する。彼女はその後，直ちにイコンの制作に傾倒していったわけではない。神田駿河台のニコライ女子神学校の宿舎に住み，ロシア語を教えたりしていた。現存する記録から山下は帰国後7年間イコンを製作していない。正教会から離れていた時期があるようだ。西洋画への断ち切れない思いがあったのかもしれない。銅版画や印刷関連のラベルなども手掛けている[53]。しかし彼女の人生はイコン制作にその後の人生を捧げたといってよい。35年間にわたって東京ニコライ堂のイコンをはじめ，全国のハリストス正教会の建立にともなってイコンを書き続け，その制作点数は300をゆうに越えるといわれるが，現存するものだけでも200以上である[54]。北海道の札幌ハリストス正教会と函館ハリストス正教会に多く遺されている。東北諸教会にも比較的多く遺こされている。他の教区を見てみると東京大主教区の静岡ハリストス教会が目立つ程度で，東京復活大聖堂（ニコライ堂）は意外と少なく9点が遺されているにすぎない[55]。

山下は最初工部美術学校で日本画を学んだり，フォンタネージからイタリア絵画の西欧画を学習していたこと，さらに留学におけるロシア・イコンの学習環境などを考慮すると，彼女のイコンに山下も独自性も発見できよう。それにしても遺されたイコンほぼロシア・イコンの模写であって，鐸木氏が指摘するようにしばしば山下のイコンと特定できない場合さえある。言い換えれば帰国してからの山下は，上述したように一時期イコン制作から離れるにしても，正教会のイコン制作に没頭しイコン制作者となったといえよう。この限りでは正教について十分の理解がないままのロシア留学であった当初と帰国後画家としての苦悩を克服した山下には彼女自身にハリステニアンとして生きる覚醒があったと思われる。模写されたイコンは明らかに正教会の伝統的精神が息づいている。以下，山下のイコンを3点ばかり紹介し彼女の画業とイコンの特徴を探ってみたい。

はじめに12大祭をモチィーフにしたイコンを取り上げよう。一年の最も重要な祭日である「12大祭」（注46参照）のイコン，つまり12点のイコンが一組みをなし，イコノスタスを飾る作品であるが，これは19世紀によく見られるロシア・イコンである。山下はどこかの聖堂に置かれていたロシア制作の12大祭イコンを模写したに違いない[56]。

『ゲフシェマニア（ゲッセマネ）の祈り』（図10）は，19世紀ロシアのロマン派を代表するフィヨールド・ブルーニ（1779－1875年）[57]による西欧的宗教画の模写である。この作品は西欧化を推進した皇帝ニコライのお気に入りとなり買い上げられた。ロシアでアは版画として流布し，多く模写された。日本にも18点（2点は焼失）の模写が確認されているが，

ロシアで制作されたものか，山下のものか判断が困難なものも多い。

『ウラジーミルの聖母子』(図 11)[58] は 12 世紀にコンスタンティンープルにおいて制作されロシアにもたらされた。このイコンは，聖母マリア（生神女）が幼子イエスを腕に抱いて，頬をすり寄せる図柄で「エレウサ型」と呼ばれる，聖母子像の代表的な一点である。ロシア・イコンの至宝ともいうべきイコンだ。ビザンティンから 1155 年にキエフ経由でもたらされたが，6 年後にはウラジーミルにやってきたものなのである。以来『ウラジーミルの聖母子』となった。今はモスクワのトレチャコフ美術館に収められている。いわゆる「タタールのくびき」はロシアにとって苦難の時代となった。モンゴル軍だけではなく，西からスウェーデン，続いてドイツ騎士団が侵略を開始していた。ロシアは東西の勢力により二分される危機に直面していた。歴史に翻弄される中で『ウラジーミルの聖母子』のおかげで奇跡的に諸勢力から守護されたと考えた。こうしてこのイコンはウラジーミルとモスクワの守護イコンとなったのである[59]。

山下は板に油絵の具で書いている (図 12)。44 歳の頃の作品である。このイコンの裏には唯一山下の署名と制作年代が記されている「1901 年 12 月上旬　イリナ山下里舞女」。模写とはいいながらも，トレチャコフ美術館に収められている「ウラジーミルの聖母子」の荘厳な雰囲気に比べ，色調や人物描写のタッチは一見して異なることは明らかだ。通常，板に描かれるイコンも，ここではキャンバスに描かれ，どこか甘美で柔らかな目鼻立ちで慈愛に満ちたまなざしが幼子に向けられている。たしかに伝統的な構図を活かした「ギリシア画」であるが，油絵の画法で描かれた西欧風絵画の一枚である。山下はこのイコンが気に入っていて生涯自分のもとに置いたという。

ニコライ大主教が亡くなる頃，山下は白内障を患っていた。東京のアトリエを引き払い 61 歳で故郷の笠間に戻り，1939 (昭和 14) 年 1 月 16 日享年 81 歳の生涯を閉じた。

おわりに

東方正教会が他のキリスト教会と大きく異なる点は，典礼とイコンにあることは明かであろう。本稿では東方正教会の典礼は，西欧ここではローマ・カトリックの典礼との比較においてであるが，実に多様な典礼があることを指摘した。さらにそれらの多様性は典礼の言語を各地区のことばを重視した結果であることもその一つの要因であったことも明白になった。ローマ・カトリック教会がラテン語を長期にわたって典礼の唯一の言語としてきたことを考慮すると，東方正教会における典礼の多様性は当然と言えるかもしれない。

東方正教会典礼の特徴は祭儀，とりわけ奉信礼における秘儀性とその象徴性にあるといえよう。北回りで辿り着いたもう一つのキリスト教，つまりロシア正教はビザンティ典礼を日本にも伝えたことになる。典礼の儀式は発展を遂げ，ごく細かい典礼注記までが固定化するにいたる。輔祭の役割も重要になった。シリアに由来するといわれるイコノスタスはイコンで覆われる壁となる。司祭の祈りは大部分小声になる。会衆は讃歌を詠い，輔祭に先導されて連祷形式の祈りを交唱する。厳粛さが醸し出さるとともに会衆の参加を促して

いるところに，ローマ・カトリック教会との相違が見られる。ローマ・カトリック教会では典礼は聖職者に独占されるようになってしまうのと対照的といえよう。秘跡（機密）については本稿では取り扱わなかった。本稿の範囲を超えているからである。

イコンは典礼と一体をなす構成要素である。イコンについても歴史的，地域的多様性が認められる。簡素な聖堂にはイコンが重要な位置を占めない場合もある。しかし，ロシアを経由して日本に伝えられた正教は既に近現代の西欧文化を身に纏った正教であった。イコンはビザンティン様式のイコンとイタリア宗教画を吸収したイコンがせめぎ合う中で発展する。イコンは美術館に収められているものもあるが，イコンは基本的に様式や構成が規範化されていて制作者の自由な発想によって描かれるものではない。本稿では一貫してイコンは「書く」ものとしてきた。イコンの裏に制作年代や署名の入れられるものはありえない。イコンの製作者は美術品を描く表現者ではなく，イコンを通して神聖な領域を明らかにすること，聖性の存在を示すもので，イコンそれ自体，象徴的言語ともいうべきものなのである。

山下りんは19世紀末ロシアでイコン制作を学ぶため留学する。2年という短い期間であったが彼女が残した日記から彼女自身の絵画に向き合う生活を窺い知ることができるとともに，当時のロシアにおけるイコン制作の現状が浮き彫りにされる。イコンは規範性を保持する（ビザンティン様式）ため当世の代表的イコンの多くが模写された。山下が遺したイコンはほとんどが模写されたものであることが分かっている。イコノスタスに掲げられるイコンの場合模写は問題とならない。問われるのは，正教会の神学的視点に立脚して書かれているか，ビザンティン様式をロシア的美的感性で規範化された聖像であるか，どうかであろう。儀礼の美意識がイコンを通して信仰の高みまで引き上げられる。「イコンで表現される神学」概念が正教を正教会たらしめているといえよう。山下は当初こうしたイコンの把握に困惑したようである。留学後もイコン制作に打ち込めない日々が続いたという。ニコライ大主教のことばもあって，全て吹っ切れたようにイコンの制作に没頭し，全国へ日本正教会の布教が拡大し諸教会が設立されるたびに多くのイコンを書くことになったのである。

注

[1] キリスト教史において東方正教会と名称されギリシア正教やロシア正教などがある。東方正教会とは，キリスト教世界の東に位置するからであり，西欧近代主義を取り込んできたカトリック教会と異なって，オリエント生まれのキリスト教の伝統を維持しているとされる。

[2] 東方正教会では第1ニケアから第4コンスティノプル会議までの7回だけを普遍的公会議（正教では全地公会議）とする。）

[3] パーウエル・エフドキモフの説明。アンリ＝イレネー・ダルメ（市瀬英昭訳）『秘儀と象徴――東方典礼への招き――』新世社，2002年，13頁を参照。

[4] 南方セム語のひとつ。エチオピア正教会の典礼語となる。

[5] 451年，小アジアのカルケドン（コンスタンティノポリスの対岸，現在のトルコ共和国イスタンブール市のアジア側にあるカドゥキョイ地区）において451年で開かれた第4回全教会会議。単性論およびネストリウスを批判して，キリストが2つの本質（神性・人性の

両性）を完全に，混ざらず，変わらず，分かれず，離れない形でそなえるという正統教義を表明する。いわゆるカルケドン信条を定めた。

[6] アンリ＝イレネー・ダルメ（市瀬英昭訳）『秘儀と象徴 —— 東方典礼への招き ——』20 頁を参照。

[7] 現イラク領にある古代都市の遺跡。バグダードの南東，チグリス川を挟んで対岸にあった都市と併せてクテシフォン・セレウキアという。

[8] マスロプ（361－449 頃）はアルメニア教会の修道士で，アルメニア・アルファベット文字を考案した。彼以前はシリア人主教ダニエルが考案していた文字が使用されていたが，セム語と言語体系がことなるアルメニア語（インド・ヨーロパ語族）には不向きであった。そこでマスロプは新しい 36 文字からなるアルファベットを案出した。弟子たちと共に聖書のアルメニア語訳を行なったといわれている。

[9] アンリ＝イレネー・ダルメ（市瀬英昭訳）『秘儀と象徴 —— 東方典礼への招き ——』21 頁を参照。

[10] これらの教会は聖書のエデン，つまり楽園を流れる 4 つの大河として喩えられる。西アジアは基本的に雨量が極めて少なく天水農耕（年 200 ミリ以上の雨量を必要とする）は限定的である。この地に再生と肥沃をもたらすものは大河の恵みを受けた灌漑農耕によらざるを得なかった。もちろん 4 つの大河を地理的に特定することはできない。

[11] アンリ＝イレネー・ダルメ（市瀬英昭訳）『秘儀と象徴 —— 東方典礼への招き ——』21-22 頁を参照。

[12] ビザンティン帝国でもヘレニズム教育は優遇されていた。すぐれたギリシア正教の思想家のほとんどはヘレニズム思想にも精通していたのである。彼らはそれをギリシア正教の思想を形成する道具として大いに用いた。

[13] 川俣一英『イコンの道 —— ビザンティンからロシアへ ——』東京書籍，2004 年，8-9 頁を参照。

[14] アンリ＝イレネー・ダルメ（市瀬英昭訳）『秘儀と象徴 —— 東方典礼への招き ——』36-37 頁を参照。

[15] 同上，70-71 頁を参照。

[16] 同上，同頁。

[17] ユダヤ教の集会や礼拝の場所。前 6 世紀のバビロン捕囚の時代に神殿で礼拝ができなくなったため発達した。

[18] 聖堂内の祭壇周辺部分の空間。一般的には身廊より高くなっていて後に内陣障柵によって区分される。

[19] アンリ＝イレネー・ダルメ（市瀬英昭訳）『秘儀と象徴 —— 東方典礼への招き ——』72 頁を参照。

[20] モーセの召命の記事の中で，聖なるところに入る前に靴を脱がなければならないことが記されている。「ここに近づいてはならない。足から履物をぬぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから」『旧約聖書』出エジプト記 3 ： 5 。

[21] 奉献文。韻文を持つ典分で典礼の中心をなす式文。

[22] アンリ＝イレネー・ダルメ（市瀬英昭訳）『秘儀と象徴 —— 東方典礼への招き ——』72-73 頁を参照。

[23] ロシアの北西部，ボルホフ川岸にある古都。

[24] アンリ＝イレネー・ダルメ（市瀬英昭訳）『秘儀と象徴 —— 東方典礼への招き ——』74 頁を参照。

[25] 同上，75 頁を参照。

[26] ローマにあるドミテラのカタコンベより。ギリシア語の「魚」ΙΧΘΥΣ はイエス・キリスト，神の子，救済者の頭字を当てたもので初代キリスト教におけるイエスの象徴として使用された。
http://www.jesuswalk.com/christian-symbols/anchor. より参照。

[27] 洪水物語の主人公ノアと共に描かれることも多い。鳩は嘴に豊饒と平和の象徴であるオリーブの若葉をくわえている。
http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Noah_catacombe. より参照。

[28] 古来この地域では不滅を象徴していた。した

がって孔雀は初代キリスト教徒たちには復活への象徴と看做された。雄の羽根に見られる文様は全方位を見通す神の目に見立てられた。
http://www.boston-catholic-journal.com/a-primer-to-catholic-symbolism.htm より参照。
およそ3世紀頃のローマ時代，プリスキラのカタコンベより。

[29] 正教会では信仰を正しく導く聖人たちに用いられる用語。主教や神父などの聖職者のみならず，修道士や修道女を含む。使徒たちの後に続く使徒父から現代まで多くの聖師父が存在する。この意味で一般に知られる教父と区別されるべきである。教父なる用語は，使徒以降1－2世紀のキリスト教の指導者や2－8世紀における神学的著作者や精神的指導者に使用される。

[30] C. カヴァルノス（高橋保行訳）『正教のイコン』12頁を参照。

[31] V. ロースキイ（宮本久雄訳）『キリスト教東方の神秘思想』勁草書房，1986年，における宮本久雄の序文「ギリシア教父の思索」28頁を参照。

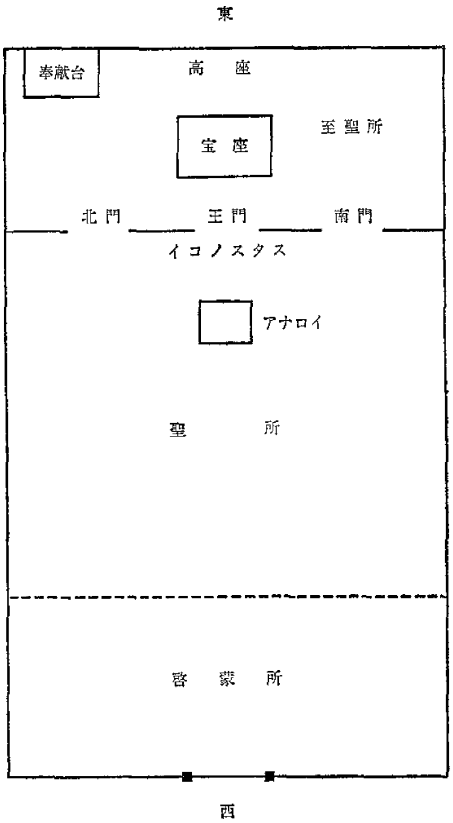
[32] ビザンティン帝国は東方各地との貿易で繁栄した。香料，絹織物，ダマスコ織り，宝石にガラス製品などいずれも西欧人に珍重された。

[33] ニネヴェの北宮殿に施された帝王のライオン狩り（前7世紀中葉）手負いの牡ライオン，瀕死の牝ライオン等。田辺勝美，松島英子　責任編集「東洋編16巻」西アジア『世界美術大全集』小学館，2000年，96-98頁を参照。

[34] 石ないし焼成粘土で作られた。前4千年紀の神殿から発見されている。「古代メソポタミア」『世界地理大百科』マイケル・ローフ（松谷敏雄訳）朝倉書店，67頁を参照。

[35] 教会堂内部見取り図　高橋保行『イコンの心』93頁参照。（右欄の図を参照のこと）アナロイとはイコン，不朽体，祈祷書（福音経，使徒経含む）などを置く台のことである。

[36] 10世紀初頭に制作された。聖母子，ユスティニアヌス帝とコンスタンティヌス帝。イスタンブールのアギア・ソフィア大聖堂。この聖堂には極彩色豊かなモザイクイコンが多数見られる。右は聖ディメトリオス（？）と二人の子ども（？），7世紀初頭のモザイク画，テサロニキのアギオス・ディミトリオス聖堂。
ジョン・ラウデン（益田朋幸訳）『岩波世界の美術　初期キリスト教美術・ビザンティン美術』岩波書店，192頁と167頁を参照。
皇帝が聖母子に大聖堂と街を捧げ，キリストの恩寵を懇願している。



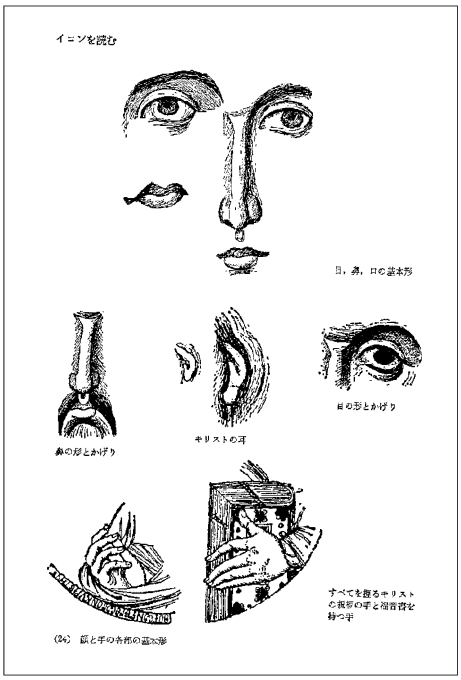
教会堂内部見取り図

[37] C. カヴァルノス（高橋保行訳）『正教のイコン』17頁を参照。

[38] ここの会堂名や地域名については『正教のイコン』18-19頁を参照されたい。
壁画　磔刑　1209年　セルビアのストゥデニツァ修道院
ジョン・ラウデン（益田朋幸訳）『岩波世界の美術　初期キリスト教美術・ビザンティン美

術』382 頁を参照。

[39] 目はこの世に対する憐みの目である。鼻は必ずと言っていいほど魚の形をしている。ビザンティン様式では明確に魚の形を確認することができる。カタコンベの魚の図柄を見てイエス・キリストを想起するのと同じである。口は憐みを表現するべくふっくらとしていて閉じられている。沈黙する閉じられた唇の線は神の旨に従う意思を表しているのである。顔のみならず体の姿勢や手の位置，服装などでも語るのである。高橋保行『イコンの心』春秋社，2003 年，158 頁参照。



[40]『カーンの聖母子』1260 年代／1280 年代のテンペラと金箔の板絵。ジョン・ラウデン（益田朋幸訳)『岩波世界の美術　初期キリスト教美術・ビザンティン美術』393 頁を参照。

[41] 大下智一『山下りん ―― 明治を生きたイコン画家』北海道新聞社，2004 年，134-1136 頁参照。山下リンについての充実した文献と年表が載せてある。

[42] 板絵イコンに代わってカンバスイコンが一般化されるようになる。その理由は板絵イコンの場合年月とともに板に橇が生じてしまうからで，橇を防ぐための工夫もされてきたが，王門を飾るイコン等はカンバスイコンの方が現実的であった。函館の正教会のイコノスタスはロシアで制作されたものでカンバスイコンである。

[43] C. カヴァルノス（高橋保行訳）『正教のイコン』25-26 頁を参照。

[44] 家庭で客人をもてなす客室の一隅にはイコンを掲げた祭壇が設けられている。客人は先ずこの祭壇の前で十字を切って跪拝し挨拶するのが常であった。

[45] ロシア正教の場合 5 段になる場合もある。函館ハリストス正教会は 3 段組みである。

[46] 12 大祭は生神女福音祭（4 月 7 日)降誕祭（1 月 7 日)，進堂祭（12 月 4 日)，洗礼祭（1 月 19 日)，変容祭（8 月 19 日)，ラザロの復活祭，聖枝祭，十字架祭（9 月 27 日)，復活祭，昇天祭，五旬祭，生神女就寝祭（8 月 28 日）である。ただし組み合わせは異なる場合もある。なおこれらの暦はユリウス暦による。日付のないものにはいわゆる移動祝日が含まれる。

[47] C. カヴァルノス（高橋保行訳）『正教のイコン』43 頁を参照。

[48] 初代聖堂は函館大火で焼失現在の二代目聖堂は 1916（大正 5 ）年に建立された。

[49] 函館ハリストス正教会の案内と説明書によるイコノスタス。(次頁図参照)

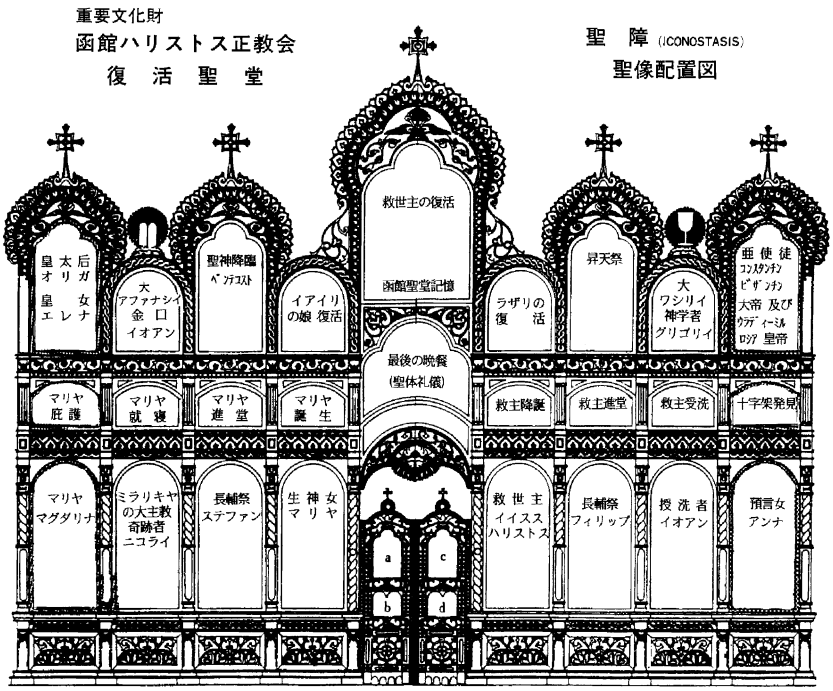
[50] 山下の日記をもとに彼女の画業を克明に追ったものに大下智一『山下りん ―― 明治を生きたイコン画家』を参照せよ。

[51] アレクセイ・ポタホフ『明治期日本における東方正教会の位置及び影響』日本ハリストス正教会教団東京大主教々区宗務局，2004 年，19-20 頁を参照。

[52] 同上，訳注 3 参照。鐸木道綱「近代ロシア美術と山下りん」中村喜和，トマス・ライマー編『ロシア文化と日本　明治・大正期の文化交流』彩流社，1995 年，259-260 頁を参照。

[53] 大下智一『山下りん ―― 明治を生きたイコン画家』160-161 頁を参照。山下はイコンを積極的に書くまで，版画や印刷に関わるものが多い。

[54] 山下りん聖像所蔵教会一覧【岡山大学文学部



a.天使長ガウリイル　b.福音者マトフェイ & マルク　c.マリヤ福音　d.福音者ルカ & イオアン

鐸木道剛助教授資料提供】東日本教区北海道諸教会に限定した。（次頁一覧参照）

[55] 日本正教会のホームページ http://www.orthodoxjapan.jp/山下りん聖像所蔵教会一覧から一瞥して分かる。

[56] 12一組の12大祭画は札幌，函館，上武佐，一関，福島（昇天を欠く）諸教会に掲げられている。12点のうちギュスターブ・ドレとユリウス・シュノルから借用した構図が2点ずつ含まれているが，山下自身が独自に彼らから図柄を借用したというよりは，東京のロシア公使館の付属礼拝堂にあった（？）12大祭のイコンを模写した可能性が高い。というのはシュノルの『よきサマリア人』と『収税人とパリサイ人』やドレの『やもめの献金』の構図は1912年にV. P. グリヤノフが制作したモスクワのボゴヤヴレー聖堂の壁画になっている。シュノルの構図はセルビアやギリシアにおいても借用されている。ドレの聖書挿絵は1878年にロシア語版が刊行されていた。これらのことからシュノルやドレの図柄がロシア経由で日本にもたらされたことは容易に推測できる。山下はそれらを借用したのである。『山下りんとその時代展』読売新聞社，1998年，58頁を参照。アレクセイ・ポタホフ『明治期日本における東方正教会の位置及び影響』脚注7参照

[57] 画家ブルーニについては『山下りんとその時代展』91頁を参照。
右が山下の模写で左がブルーニのゲフシマニアネの祈り。構図において極めて類似することは明らかである。
アレクセイ・ポタホフ『明治期日本における東方正教会の位置及び影響』による図版2－3を参照。

[58] 高橋榮一　責任編集「西洋編　第6巻」ビザンティン美術『世界美術大全集』小学館，2000年，298頁を参照。

[59] 川又一英『イコンへの道 —— ビザンティンからロシアへ ——』東京書籍，2003年116-119頁を参照。

※本稿は北海学園大学開発研究所の助成を受けた研究成果の一部である。

山下りん聖像所蔵教会一覧

教会名	上武佐ハリストス正教会	
所在地	〒086-1271　北海道標津郡中標津町字武佐南9線西1番地	
所蔵作品	救主ハリストス（全身像） 復活聖像 生神女進堂祭 降誕祭 神現祭　顕栄祭 聖枝祭 聖神降臨祭 十字架挙栄祭	至聖生神女（全身像） 生神女誕生祭 生神女福音祭 迎接祭 昇天祭 生神女就寝祭

教会名	札幌ハリストス正教会	
所在地	〒062-0042　北海道札幌市豊平区福住二条2丁目3－1	
所蔵作品	救主ハリストス（全身像） 至聖生神女（全身像） 神使長ガウリイル 受胎告知のガウリイル 福音記者マトフェイ 福音記者ルカ 復活聖像 復活聖像 生神女進堂祭 降誕祭 神現祭 聖枝祭 聖神降臨祭 十字架挙栄祭 磔刑の聖像 大十字架	至聖生神女（全身像） 神使長ミハイル 最後の晩餐 受胎告知のマリア 福音記者マルコ 福音記者イオアン 聖セルギイ聖像 生神女誕生祭 生神女福音祭 迎接祭 顕栄祭 昇天祭 生神女就寝祭 眠りの聖像 コゼリシチナの生神女

教会名	釧路ハリストス正教会	
所在地	〒085-0832　北海道釧路市富士見2丁目1－35	
所蔵作品	神現祭 救主ハリストス（笏と球を持つ） 大十字架	救主ハリストス（笏と球を持つ） コゼリシチナの生神女

教会名	函館ハリストス正教会	
所在地	〒040-0054　北海道函館市元町3－13	
所蔵作品	救主ハリストス（半身像） 復活聖像 生神女進堂祭 降誕祭 神現祭　顕栄祭 聖枝祭 聖神降臨祭 十字架挙栄祭 ハリストス（パンと葡萄酒を持つ）	至聖生神女（半身像） 生神女誕生祭 生神女福音祭 迎接祭 昇天祭 生神女就寝祭 眠りの聖像

教会名	小樽ハリストス正教会	
所在地	〒047-0034　北海道小樽市緑1丁目15－13	
所蔵作品	救主ハリストス（半身像）	至聖生神女（半身像）

図 1

図 2

図 3

図 4

図 5

図 6

図 7

図 8

図 9

図 10

図 11

図 12